

精巢鞘膜腔内嚢胞の1例

国立大阪病院泌尿器科 (医長 : 高羽 津)

今津 哲央, 高山 仁志, 月川 真
辻村 晃, 菅尾 英木, 高羽 津

国立大阪病院病理部 (部長 : 倉田明彦)

竹田 雅司, 倉田 明彦

CYSTS IN THE CAVUM TUNICA VAGINALIS
TESTIS: A CASE REPORTTetsuo Imazu, Hitoshi Takayama, Makoto Tsukikawa,
Akira Tsujimura, Hideki Sugao and Minato Takaha*From the Department of Urology, Osaka National Hospital*

Masashi Takeda and Akihiko Kurata

From the Department of Pathology, Osaka National Hospital

A case of cysts in the cavum tunica vaginalis testis was reported. A 58-year-old man visited our clinic with the chief complaint of urethral bleeding. Urethro-cystogram revealed stricture of bulbous urethra. We palpated several pea-sized painless masses in the left scrotum. On ultrasonogram of the left scrotal contents several cystic lesions were detected at the cranial side of the left testis. At operation, cysts were found in the cavum tunica vaginalis testis, and were resected along with the tunica vaginalis. Fluid of the cysts was serous without sperm. Histopathologically mesothelial cyst was suspected. The incidence of cysts in the cavum tunica vaginalis testis is rare and only 17 cases have been reported in Japan. We reviewed 9 cases of cysts arising from lamina parietalis of tunica vaginalis.

(Acta Urol. Jpn. 40 : 725-728, 1994)

Key words: Cavum tunica vaginalis testis, Cyst

緒 言

精巣鞘膜腔内嚢胞はきわめて稀な疾患である。われわれは精巣固有鞘膜壁側板に発生した漿液性嚢胞の1例を経験したので報告する。

症 例

患者 : 58歳, 男性
主訴 : 尿道出血
家族歴・既往歴 : 特記すべきことなし
現病歴 : 1993年4月28日, 尿道出血を主訴に当科受診。尿道膀胱造影を施行したところ, 球部尿道に狭窄を認め, さらに, 左陰囊内に多発性の腫瘍を触知し, 左精巣上体腫瘍を疑い, 精査加療目的で入院となった。

現症 : 身長 171 cm, 体重 58 kg, 左精巣上体から精索にかけて, 弾性硬, 小豆大までの連珠状の無痛性腫瘍を触知し, また左精巣静脈瘤を認めた。右陰囊内容には異常を認めず, 他に理学的所見に異常を認めなかった。

検査成績 : 入院時検査成績では, 検血, 血液生化学に異常を認めず, 検尿で, 潜血, 糖, 蛋白, いずれも陰性。沈渣は, RBC 2~3/F, WBC 3~5/F, 尿細胞診は陰性であった。

画像診断 : IVP では異常を認めなかった。尿道膀胱造影では, 球部尿道に狭窄像があり, さらに, 内視鏡的にも同部に狭窄を認め, 内尿道切開術の適応と思われた。左陰囊内容の超音波検査では, 精巣の頭側に, 径 1 cm 弱の嚢胞性病変が数個連なって認められた (Fig. 1)。

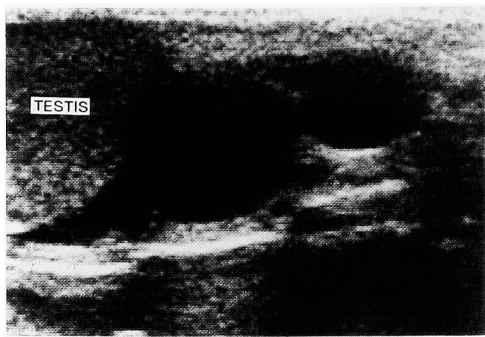


Fig. 1. Ultrasonogram of the left scrotal contents. Several cystic lesions were detected at the cranial side of the left testis.

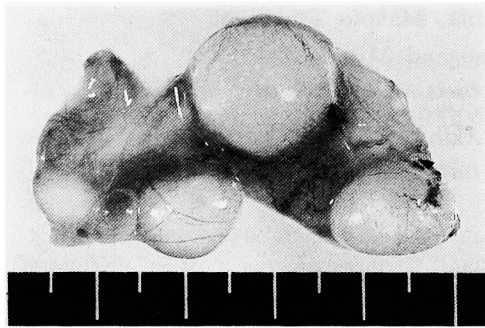


Fig. 2. Gross appearance of the resected cysts.

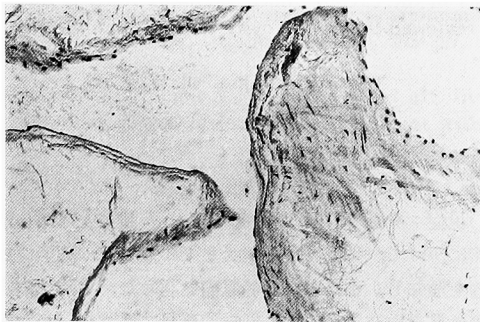


Fig. 3. Microphotogram showed that the inside lining of the cyst wall was composed of squamous cells. (HE stain)

以上より、外傷性尿道狭窄および、左精巣上体嚢胞性腫瘍の診断にて、1993年7月15日、手術を施行した。左陰嚢部切開を加え、精巣鞘膜を開くと、少量の黄色透明な内容液を認めた。続いて左陰嚢内容を脱転させたところ、腫瘍は嚢胞状で、精巣および精巣上体とは離れて、精索付近に存在しており、精索部には静脈瘤を認めた。このため、精巣鞘膜に発生した嚢胞と考え、周囲の精巣鞘膜を含めて嚢胞を一塊として摘出

した。摘出標本では、腫瘍は半透明な膜を有する球形の嚢胞で、数 mm から約 1 cm の大きさのものが計 6 個であった (Fig. 2)。また、嚢胞内容液は、淡黄色透明、漿液性であり、精子は認められなかった。なお、球部尿道狭窄に対しては、直視下内尿道切開術を施行した。

病理組織学的には、嚢胞壁には一層の扁平な細胞の lining を認め、その内腔には赤血球や精子を認めず、悪性所見はみられなかった (Fig. 3)。また免疫組織化学染色では、嚢胞壁は Factor VIII が陰性であり、血管やリンパ管の内皮細胞が陽性を示していたことより、嚢胞壁を構成する細胞は中皮由来であることが疑われた。

以上より精巣固有鞘膜壁側板より発生した精巣鞘膜腔内嚢胞と診断し、中皮由来の、Mesothelial cyst が最も疑われた。術後経過は順調で、11日目に退院し、7ヶ月を経た現在、再発を認めていない。

考 察

精索や陰嚢内容の嚢胞は Gibson¹⁾ によれば大ききつぎの 5 群に分類される。すなわち、

- 1) cysts of peritoneal origin due to failure of obliteration of the processus vaginalis
- 2) cysts of the epididymis
 - a) retention cysts filled with spermatozoa (spermatoceles)
 - b) simple serous cysts
- 3) cysts of the fetal remains, Mullerian duct and Wolffian body, such as the paradidymis or organ of Giraldez, appendix testis (hydatid of Morgagni), and the appendix of the epididymis
- 4) hematoceles
- 5) miscellaneous rarer conditions: echinococcus cysts, filariasis, dermoid cysts, hemangiomas and lymphangiomas

などである。そしてこれらを鑑別するにあたっては嚢胞上皮の組織学的所見や嚢胞内容の精子の有無が参考にされている。しかし円柱上皮でも陳旧化すると扁平な立方上皮に変化したり、また精子は自然に吸収消失する例もあるため、飯塚ら²⁾ が述べているように、嚢胞の解剖学的な存在部位により分類し検討すべきと考えられる。

精巣固有鞘膜は、発生学的には腹膜に由来し、解剖学的には、精巣と精巣上体を被う臓側板 (lamina visceralis)、精巣上体の後縁に沿う精巣間膜 (meso-

Table Nine cases of cyst arising from lamina parietalis of tunica vaginalis testis reported in the Japanese literature

No.	報告者	報告年	年齢	患側	症状	大きさ(最大径)・数	内容液	嚢胞内面	文献
1.	坂ら	1977	5	右	陰囊部腫脹	拇指頭大・1	漿液性	中皮細胞	泌尿紀要 23:67-73, 1977
2.	坂ら	1977	56	両	無痛性腫瘍	米粒大・左9 右2	漿液性	一層の立方上皮 (線毛あり)	〃
3.	中嶋ら	1982	7	左	左下腹部痛	38 mm・1	血性	肉芽組織 (fibrin沈着)	臨泌 36:581-583, 1982
4.	平野ら	1988	8	右	有痛性腫瘍	10 mm・1	血性	結合組織 (fibrin沈着)	泌尿紀要 34:2201-2203, 1988
5.	長藤ら	1988	66	右	無痛性腫瘍	7 mm・1	黄色透明	中皮細胞 (立方状)	西日泌尿 50:1993-1995, 1988
6.	高ら	1989	40	左	無痛性腫瘍	20 mm・1	黄色透明	中皮細胞 (扁平化)	日泌尿会誌 80:1117, 1989
7.	菊地ら	1991	51	左	有痛性腫瘍	小指頭大・12	漿液性	扁平な細胞	臨泌 45:701-703, 1991
8.	中川ら	1993	69	左	無痛性腫瘍	35 mm・多房性	記載なし	多列円柱上皮 (線毛あり)	臨泌 47:161-163, 1993
9.	自験例	1993	58	左	無痛性腫瘍	小豆大・6	漿液性	一層の扁平な細胞	

thelium), 精巣間膜が反転して臓側板を外方から囲む壁側板 (lamina parietalis), の3部に分けられ, この3部で囲まれた部位が精巣鞘膜腔 (cavum tunica vaginalis testis) である。自験例は精巣固有鞘膜のうち精索を被う部位に存在し, 鞘膜腔に突出していたものであり, 発生部位としては壁側板の範囲にはいる。

精巣鞘膜腔に発生する嚢胞はきわめて稀で, 明らかな精巣白膜嚢胞を除くと, 本邦では自験例を含めてもわれわれが調べたかぎり17例が報告されているにすぎない。(精巣白膜嚢胞として報告されているもののなかで精巣上体にも嚢胞を認めたものを含める。)しかし, 臓側板から発生した嚢胞は, 精巣白膜嚢胞などと鑑別することは厳密には困難であると思われる³⁾ため17例中, 精巣部または精巣上体部に発生していた6例³⁻⁵⁾と不明例2例^{9),10)}の計8例を除外し, 壁側板に発生した本邦報告例9例 (Table) について検討を加えた。

年齢は, 5歳から69歳で, 若年層 (3例) と中高年層 (6例) にみられ, 患側は, 左5例, 右3例, 両側1例であった。臨床症状では, 無痛性腫瘍が5例と過半数を占め, 有痛性腫瘍が2例であった。嚢胞の最大径は, 米粒大から38mm大のものまでさまざまで, 単発例が5例であった。内容液は漿液性のものが多く, 血性のものが2例であった。全例とも精子は認めなかった。

組織学的には, 嚢胞の内面は, 内皮細胞で被われているとしているものが3例, 線毛を有していたものが2例, 扁平な細胞で構成されたものが2例であった。自験例においては, 嚢胞壁に明らかな中皮細胞は認め

ないものの, 免疫組織化学染色により, 血管やリンパ管の内皮細胞由来のものは否定的であり, 中皮細胞由来の Mesothelial cyst が疑われた。

結 語

58歳の男性にみられた精巣鞘膜腔内嚢胞の1例を報告するとともに, 精巣鞘膜壁側板に発生した本邦報告例9例について若干の文献的考察を加えた。

本論文の要旨は, 第145回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した。

文 献

- 1) Gibson TE: Cysts of the spermatic cord, epididymis and testicular tunics. In: Urology. Edited by Campbell MF and Harrison JH, 3rd ed., vol II, pp. 1252, Saunders Co, Philadelphia, 1970
- 2) 飯塚典男, 大石幸彦, 小野寺昭一. ほか. 辜丸旁体から発生したと思われる左陰囊内多発性嚢腫の1例. 臨泌 37:1015-1017, 1983
- 3) 池本 庸, 田代和也, 和田鉄郎: 精巣鞘膜腔内嚢胞. 臨泌 41:537-539, 1987
- 4) 重松俊朗, 松岡 啓, 谷村 晃, ほか: 辜丸鞘膜臓側板より発生した嚢胞の1例. 西日泌尿 38:98-100, 1976
- 5) 徳永周二, 平野章治, 美川郁夫, ほか: 辜丸白膜嚢胞の2例. 西日泌尿 44:293-297, 1982
- 6) 秋鹿唯男, 間宮良美, 佐々木寿: 副辜丸部および辜丸総鞘膜に発生した Mesothelial cyst と思われる1例. 日泌尿会誌 75:856, 1984
- 7) 阿部良悦, 山中雅夫, 並木恒夫: 早期に診断された辜丸白膜嚢胞の1例. 臨泌 38:915-917, 1984

- 8) 居原 健, 湯下芳明: 副辜丸 Mesothelial cyst
の1例. 日泌尿会誌 77:1225, 1986
- 9) 安藤 徹, 外川八州雄: 陰嚢内仮性嚢胞の1例.
日泌尿会誌 69:1532, 1978
- 10) 友部光朗, 服部一紀, 白岩浩志, ほか: 陰嚢内嚢
胞の1例. 茨城臨医誌 28:159, 1992
(Received on February 16, 1994)
(Accepted on April 22, 1994)